Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

論　文

日本経営倫理学会誌
第22号（２０１５年）

草創期の神戸高等商業学校における道徳教育

Moral Education at Kobe Higher Commercial School in its Pioneer Days

高崎経済大学　井　上　真由美
Takasaki City University of Economics　Mayumi INOUE

SUMMARY

Kobe Higher Commercial School is the second oldest government school for advanced commercial education in Japan. It was established in 1902, following the same kind of school in Tokyo that reorganized in 1887. Although most researchers do not seem to have paid attention until recently, in fact, the school tried to put a great deal of effort into ethics education in its initial days. The present writer believes it's very important for us to study the methods for teaching business ethics at this school because we could learn from those how the school head arranged the relation between the two concepts that appeared to be antithetic－business and ethics. That's why the specific details on the experiments at the school will be discussed in this paper.

はじめに

よく知られているように、森有礼による商法講習所の設立（1875（明治８）年）を嚆矢として、明治初頭のわが国では外国貿易の実務を教授する学校が矢継ぎ早に設立された。しかし明治政府の商業教育に対する当時の優先度が低かったので（橘木、2012）、こうした商業学校は、実際に貿易に携わる者を除く大方の支持を得られず、当初はその存続も危ぶまれるほどであった（天野、1993）。

しかし商業軽視の潮目は日清戦争前後に変化し始めたという（水島、1924）。というのは、その頃の日本は国内商人による直貿易の大幅な増大を経験しており、それにともなって高度な貿易実務に対応できる人材の需要も高まっていたと考えられるからである[1]。また同時に、渋沢栄一など著名人らによる商業教育の立ち遅れという主張も散見されていた。官立第二番目の高等商業学校として神戸高等商業学校（以下、神戸高商とする）が設立された1902年とは、このように商業実務と商業教育の重要性が認知されつつあった時期にあたるといえるだろう。

この小論は草創期の同校における商業教育の特徴を明らかにすることを目的とする。とりわけ初代校長であった水島銕也[2]の教育理念ならびにその活動に着目し、これまであまり論じら

NII-Electronic Library Service

れてこなかった商業教育における徳育の側面を明らかにする。また、その徳育が後にビジネスリーダーとなった卒業生たちのあり方にどのような影響を及ぼしたのかについても考察したい。

1．問題意識

草創期の神戸高商における商業教育に言及している既存研究を手掛かりにして筆者の問題意識を示せば以下である。

李（1992）ならびに神戸大学百年史編集委員会編（2002）によれば、校長水島のもと、神戸高商では法律や経済のような学理的研究のみでなく実際との関係を重視した学問をその教育活動の中心に置いていたという。しかしすでに触れたように、同校では実践的な学問に加えて徳育にも力を入れていたのである。たとえば同校が発行していた『学友会報』における水島の教訓談（①学問の応用、②体力の養成、③道徳の修養、④その他）[3]は、このことを明白に示しているし、他にも水島のもとで学んだ学生たち、とりわけ出光佐三（出光興産の前身である出光商会の創業者）が彼を「士魂商才」の人であったと評していたことなどからも知ることができる[4]。

そうすると、当時の神戸高商において徳育のためのどのような制度が用意されていたのか、という疑問が生ずる。李（1992）および神戸大学百年史編集委員会編（2002）は、もちろん同校の教育制度を紹介してはいる。しかし両者はともに同校の「独自性」に着目しているのであって、それぞれの制度の性格規定という観点は乏しい。両者が紹介しているのは、たとえばア）商業学校生にも上級学校への進学の道を開いた「予科二部制度」、イ）学理とともに実学を重視するカリキュラム、ウ）商務研究制度（ゼミナール制度）の導入、エ）水島個人の学生への対応（個別面談、就職の斡旋）などである。このうちア）「予科二部制度」、イ）学理とともに実学を重視するカリキュラム、ウ）商務研究制度の導入は、どちらかといえば（上記した水島の教訓談のうちの）「①学問の応用（実学）」を促進する制度だと考えることができるだろう。しかし体育のことを別とすれば、徳育を促進する仕組みとして何があったのか、という点についてはよくわからないのである。

「神戸高商の校風とは何か」という問題をめぐって学生らが議論を戦わせた経緯を記述した天野（2003）は、この小論のテーマとかかわりがあるように思われる。同論文は、水島の率いる神戸高商の雰囲気（村塾的雰囲気）のことに、さらには同校の構成員の一体感（一大学園共同体）のことに言及している。しかし村塾的雰囲気にせよ、学園共同体にせよ、それは水島の教育理念との関係において何を含意するのであろうか。確かに同論文は、それらが同校におけるある種の徳育の成果であったことをほのめかしてはいる。しかし徳育そのものには触れられておらず、ただ結果として「協同」という同校の校風の一角が生み出されたと説明しているだけである。筆者としては、問われるべきこと（そもそもなぜそのような校風が求められたのか、そのためのいかなる努力が試みられたのか、水島の果たした役割とはどのようなものだったのか）がまだ残されているように思われる。

2．課題

水島の率いた神戸高商は、表1にみられるように多くのビジネスリーダーを輩出した（表記していないが学者や政治家もいた）。彼らはいわばビジネス方面におけるエリートであったのだが、そのような人材を養成する同校において、望ましい考え方や振る舞い方、つまり道徳が彼らに求められたことは十分に考えられることで

NII-Electronic Library Service

ある。しかし神戸高商の教育にかんするこれまでの研究は、実学が重視されていたこと、村塾的な雰囲気であったこと、あるいは当時としては先進的な教育制度が導入されていたことなどに言及してはいるが、うえのような問題意識からの分析的記述を試みてはいないように思われる。

草創期の神戸高商における商業教育の特徴、とりわけその徳育はいかになされたのか、という問いに答えるためには、①商業における徳育の意義ということにかんする水島自身の根本的な思想、ならびに②彼の思想の学生たちへの伝達方法、という２点が少なくとも明らかにされなければならない。さらにそうした彼の実践の成果といったようなものを評価するためには、③同校における徳育が卒業生たちに及ぼした影響、という点も説明されなければならない。

しかしこれらに劣らず重要な問いは、④そもそもなぜ同校では徳育が重視されたのか、ということである。この点は水島の思想を跡付けることによってある程度の輪郭を得ることができるだろう。また当時の学生たちの政財界に対する不満の意見を参照することによってもうかがい知ることができるだろう。とはいえよく考えてみれば、徳育の必要性が当時あらためて認識されていたという事実は、彼らをとりまく環境が目にみえて動揺していたことを意味しており、しかもそのことが、ほかならぬビジネス活動に由来していたということすら考えられるのである。神戸高商の徳育重視という事実が投げかける問題性の範囲は、じつは相当に広いのではないだろうか[5]。

したがって筆者としては、④をこの小論の課題として設定することは避け、それ以外の３点を明らかにすることに専念したい。

３．各課題のために利用される資料について

課題①（商業における徳育の意義についての水島の思想）および課題②（彼の思想の学生たちへの伝達方法）については、主に以下の資料が用いられる。すなわち、卒業生の記した水島の評伝・エピソード集、水島の著した論文・記事、および『学友会報』（神戸大学附属図書館大学文書史料室蔵）である。『学友会報』とは、神戸高商「学友会」の編纂部が学生ならびに同

表１　実業界で活躍した草創期の主な卒業生（一部）

卒業年	氏　名	
明治41年	鈴木　寛一	三興商会会長
明治41年	三宅　亮三郎	元満鉄勤務
明治42年	出光　佐三	出光興産社長
明治42年	永井　幸太郎	日商相談役
明治43年	松阪　啓太郎	新星電機工業会長
明治43年	江波戸　鉄太郎	明治糖業取締役
明治43年	鈴鹿　昌一	全国肥料商連合会監事
明治45年	上塚　司	元満鉄勤務
明治45年	小山　実三郎	元日輪ゴム社長
大正２年	小室　健夫	豊田通商相談役

（出所）水島先生生誕百年記念事業会編（1966）。※肩書きは同書編纂当時のもの。

NII-Electronic Library Service

窓生に向けて定期的に発行していた冊子である。同冊子には水島の演説や教訓談が収録されているほか、教員や学外者の講演録・論説、また学生らの投稿文や活動報告なども掲載されている。当時の実情を把握するうえで有益な資料といえる。

課題③（同校における徳育が卒業生たちに及ぼした影響）については、卒業生らの評伝・言行録・随想が用いられる。つまり徳育を授けられた側の感想、意見ならびに彼らの卒業後の実践を参照するというのがその趣旨である。もっともこの小論で取りあげられる卒業生は、出光佐三と和田恒輔（富士電機製造・富士通信機製造の経営者）の二人に限られる。なぜなら、うえの趣旨に適当と思われる他の卒業生の資料がさしあたりみあたらなかったからである。なお出光関連の資料としては『我が六十年間』および『出光佐三言行録』、和田関連の資料としては『杉並木－随筆－』および『和田恒輔さんを偲ぶ』などが用いられる。

4．水島の商業にかんする基本的信念

4－1．士魂商才

健康上の理由から横浜正金銀行を辞したあと、水島は1896（明治29）年から母校の東京高等商業学校で教鞭をとっていた。そのころの彼は、講演や誌上において、諸外国との商戦におけるわが国の窮状を訴え、そしてそれを乗り越えるためには商業教育の拡充が国民の急務であると力説していた。こうした彼の発言のなかから、彼の実践のために置き入れられた商業の意味づけ、すなわち商業にかんする彼の基本的信念の輪郭をみてとることができる[6]。

結論からいえば、それは「士魂商才」であったと考えられる[7]。「士魂商才」というのは、「利」よりも「義」を重んずる「士族の精神／士族の品格」としての「士魂」と「経済面における工夫・創意・発明によって富を作り出し富を蓄積する才能」としての「商才」が、「国家意識を媒介として」結びついたものと説明される[8]。若干言葉を補って筆者なりにまとめれば、「士魂商才」とは「商業を有為の国民が生涯をかけて追求するに値する事業だとみなす思想」というふうにいうこともできるだろう。

たとえば1899年に公表された「我国民と商業思想」という論説において、水島はつぎのように述べていた。

> わが国は清国との戦争に勝つことはできたが、平和時の戦争（貿易）においては同国に対してすら劣位にある。戦闘にたずさわるべき士族についてはその尚武の思想が商戦に向いていないこと、他方で商業にたずさわるべきわが国の商人についてはその見識が局小かつ卑陋でやはり商戦に向いていないこと、これらがその理由である（以上、該当箇所の大意）。

そして彼は、わが国の政治経済活動をあまりに強く規定していた「尚武思想」（国力の基礎は軍事力にあるとみなす思想）を、四民一致の運動によって「商業思想」（商業とは国力を充実させるための不可欠の手段であるとみなす思想）へと転換させていかねばならない、と結論したのである[9]。

ところで、水島から強い影響を受けた出光佐三の彼に対する評価もここに付け加えておこう。先述したように、出光は水島の態度を「士魂商才」だとみなしていたが、実際には水島を「実力」の人あるいは「実力本位」の人であったと述べることのほうが多かった。たとえば、水島の生き方から当時の国難を乗り越える術を学ばなければならない、という趣旨の出光の随想がある。

> 満州事変そして現下の日支事変は、いってみれば第一次世界大戦中にはびこった政

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

界・財界の腐敗（金権政治）が招いたことなのではないか。大戦中、日本は濡れ手に粟式に大金を稼いだが、その実力不相応な成果は、政界・財界に放漫、浪費、無礼という風潮を生み出した。たしかに支那大陸および南洋への進出、東亜共栄圏の確立は果たされなければならない。だがこの大事業は、国民に予想以上の忍耐と覚悟を強いるはずのものである。現下の国難において、この大事業を成し遂げ、しかもその永続性を期待するなら、国民は何よりも実力本位で進まなければならない。しかもその実力とは、個人のそれではなく、「挙国一致の総合的団結的実力」のことである。したがって国民は、事変の解決をあせってはならない（以上、出光（2002）「国難に直面して水島先生を偲ぶ」の大意）。

ここで「実力」ないし「実力本位」が意味しているのは、当時の国難を乗り越えるにあたって、その場しのぎの手段（濡れ手に粟式）に訴えるのではなく、水島が（商業教育という方面において）学生らに示した真剣な覚悟と真摯な努力こそが必要であるということである。このように、教えられる立場からとらえられた水島像においても国家への貢献、私利追求の否定、持続的な努力などといった「士魂商才」の構成要素が表れており、水島の把持していた信念が浮き彫りになっているのである。

4－2．水島が理想としていた商人像

とはいえ筆者としては、水島が理想的な商人だとみなしていた人物を紹介すれば、彼の信念をより一層明白にすることができると考える。

水島が当時の商人を評して「局小」「卑陋」と述べていたことはすでにみたところであるが、じつは彼にとって理想的な商人が存在していた。それは1889（明治22）年に神戸で日豪間の羊毛貿易事業を開始した兼松房治郎という人物である。彼は波乱と苦難の半生を経て、すでに大阪の財界で相当の地位を築き上げていたにもかかわらず、外国人に商権を牛耳られていた当時の居留地貿易に反発して兼松商店を立ち上げたのであった[10]。

兼松および兼松商店のことについてはすでに拙稿が詳しく論じているので[11]、ここでは水島が兼松のどこに理想的商人像を認めていたのか、という点だけを紹介しておこう。兼松の死後、同商店から神戸高商に寄付された記念館の開館式（1921年）において、水島はつぎのように述べていた。「本校は云ふ迄もなく将来の企業家即ち実業界の将帥を養成せんことを期するものである。而して理想的企業家の具備すべき要素は三四にして止まらぬけれども（一）先見の明に富み（二）百折不撓の勇気あり且つ（三）其の職務に忠実なると共に（四）社会の公益を尊重する心得が無くてはならぬ。今熟〻兼松翁の伝記を閲読し又平素の行動を観察するに翁は実に典型的なる企業家であったことを発見する」（『学友会報』第149号、pp.89-91）。

この発言からもわかるように、水島にとっての理想的な商人とは、「士魂」（二、四）と「商才」（一、三）を兼ね備えた人物のことだったのである。

4－3．徳育の重視

この小論の冒頭で水島の教訓談を紹介したが、そこで話されていた内容（①学問の応用、②体力の養成、③道徳の修養）と彼の基本的信念との関係はつぎのようになるだろう。

すなわち、①学問の応用は「商才」にもとづき、③道徳の修養は「士魂」にもとづく。これは本節で説明してきたことからもたらされるひとつの解釈である[12]。今後、水島や神戸高商にかんする新事実が発見されれば、これに代わる

NII-Electronic Library Service

解釈もでてくるだろう。しかしつぎの点に疑いをさしはさむ余地はない。それは、既存研究が指摘していたような実践的な学問だけが同校の教育の特色なのではなく、同程度かあるいはそれ以上の重要性が道徳教育に置かれていたということ、そしてそのようにいいうる根拠のひとつは、ほかならぬ同校校長の商業に対する信念が公益を志向するものであったということである[13]。

本節を締めくくるにあたって、水島の品性のことにも触れておきたい。徳育を重視していた当の本人はどのような人物だったのか、と問うことは自然なことのように思われるからである。『学友会報』やその他の資料には、学生らによる水島への敬愛の念を示す記事が多く残されている。たとえば「水島先生は洵に立派な恩師として永遠に敬慕し、日々の修養の鑑と仰ぎたい」(大久保賢治郎、1916年卒業)[14]であるとか、「先生は身にそなえられた徳をもって、それを実践された」(古林喜楽、1925年卒業)[15]というふうにいわれている。だが、とりわけ水島の徳性を明確に表現した同校の外国人講師のエッセイが参考になるだろう。彼曰く、水島のなかには「落ち着いた身のこなし、穏やかさ、謙遜、ならびに思いやり、親しみやすさ、といったものが渾然一体としていた」[16]。

5．神戸高商における徳育の方法

この節は神戸高商における徳育の方法の記述にあてられる。その趣旨は、前節で確認された水島の信念が、学生たちにどのように伝えられたのかを明らかにすることである。なお同校においても、道徳教育を試みようとする場合に誰もが最初に思いつくであろう修身・道徳科目の設置や当時の名士による講演会の開催といった手法が取られており、本節においても簡単に言及するつもりではある。だが、それよりも水島を会長にいただいて組織され、かつ精力的に運営されていた風紀向上のための運動体(「学友会」の「興風部」)を記述することのほうが、実効性という観点からすれば有益であるように思われる。

5－1．修身・道徳科目の設置と講演会の開催

設立当初から神戸高商には、予科に「倫理」、本科に「商業道徳科」という徳育科目が設置されていた[17]。だが、このふたつの科目の内容にかんする情報はほとんど残されていない。ただ「倫理」については、当時簿記を担当していた教員が英語の教材を使って教えていたということである(神戸高等商業学校学友会編、1928、p.16)。

設立3年目(1905(明治38)年)からは、教育学者の谷本富が嘱託講師として招聘され、徳育科目の教授は専門家に委ねられることになった(ただし彼は1913年に辞任)。彼の教授法はつぎのようなものであったという。「私は諸君に説法をするのではない、私は人の言ったことや自分の考へたことを取纏めて御話するのであるから、諸君の中で善いと思へば参考にして呉れ、諸君は私の述べることに就て善いことか悪いことかを考へる自由を持って居るのであるから、決して私の言ふ説のみが何処までも正しいと強制する必要はない。唯諸君の参考に供するのです」[18]。このような彼の講義は、自身の語るところによれば「図らず多大の喝采を博し」、彼にとっても永く思い出される講義となった(『学友会報』第114号、p.295)。

また同校では各界の名士による講演会がたびたび催されていた(表2)。講師らは自らの経験談やわが国の進むべき進路あるいは商業にかんする自説を語って、学生らに生き方の参考を供与していたので、結局、徳育科目担当の谷本と同じことをしていたといえるだろう。試みに

NII-Electronic Library Service

1907年の大隈重信の講演録をみてみよう。

ここにおられる青年諸君は将来に対して様々な希望をもっておられるであろうが、その希望を概括して述べることができる。それは「身を立てて国に報ずる」ことである。わが日本の民族をしてますます幸福ならしめるところの根本は、じつはこの国民精神にある。では国に報ずるにはどうあらねばならないのだろうか。今日の時勢を鑑みれば、わが国は世界の競争場裡に立っているといえるが、国に報ずるためには、われわれはまず智慧と腕力の双方を手に入れなければならない。だがそれだけでは足りない。両者を完全に発達させるためには人情（道徳）がなくてはならない。これがなければ、どちらか一方に走ることになり、その結果、わが国は他国に破られてしまうだろう。したがって高等教育を受けている諸君が社会に立たねばならぬときには、智慧と腕力のみではいけない。道徳の修養が必要である。道徳といっても、それはとりわけ公の道徳のことなのであって、諸君は国家に対する公の徳義のことに心を致すべきである。これは学校の講義で教えられることではない。だから諸君は多数集まって大いに議論すべきである。もし政治を論ずるということを叱る教師があれば、それは教師が悪いのである（以上、『学友会報』第13号所収「大隈伯の演説」の大意）。

このように、同校で開催されていた講演会は、一種の徳育科目として機能していたと考えることができるのである。

表２　明治37年から41年までの神戸高商における講演

時期	講演者	演　題
明治37年	祖山鍾三（三十四銀行神戸支店長、元東京高等商業学校校長）	「神戸の貿易及ひ銀行業の進歩、諸君に望む」
	兼松房治郎（兼松商店店長）	「商人の覚悟」
明治38年	桜井鉄太郎（神戸税関長）	「パナマ視察談」
明治39年	武藤山治（鐘淵紡績会社営業部長）	「商業家の注意事項」
	渋沢栄一	「商業教育、新商人及韓国近情」
	新渡戸稲造（農学博士）	「商業道徳」
	大平賢作（商学士）	「上海金融事情」
	浅野陽吉（大阪朝日新聞記者、衆議院議員）	「諸君の前途」
明治40年	志賀重昂(衆議院議員農学士)	「樺太及び大東島」
	桑木厳翼(京都帝国大学教授文学博士)	「商業と哲学」
	前田慧雲(文学博士)	「実業家と雅懐」
	梶原仲治(日本銀行大阪支店長)	「銀行及資金に就て」
	阪谷芳郎（大蔵大臣）	
	大隈重信	
明治41年	石橋為之助(代議士)	「予が経験より得たる教訓」
	島田三郎（代議士）	「偶感」
	竹越与三郎(代議士)	「偶感」
	小松原英太郎（文部大臣）	
	河上肇（京都大学講師）	「経済学と表裏、異同、古今及び公私」
	宮川経輝（牧師）	「現代の要求と人格」

(出所)『学友会報』第1、2、4、6、7、10、11、12、13、17、18、19、21、22号。

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

5－2.「学友会」「興風部」「友団」

(1)「学友会」について

神戸大学百年史編集委員会編（2002）は、神戸高商の「校風の美を発揮」するための組織の必要性が学生のあいだで話題となり、それがきっかけとなって「学友会」が創設されたと伝えている[19]。ところが同会設置の協議が始まったのは1903（明治36）年５月下旬頃、そして発会式が挙行されたのは６月20日である。神戸高商の第一回入学式が行われたのは５月15日であるから、そこからわずか１か月あまりで同会が組織されたことになる。実際には、水島自身が同会の骨子とその必要性を説き、それに同調した学生らが中心となって設置作業が進められたと考えるほうが自然だろう。水島が初代会長に推戴されたことを考慮に入れれば、なおさらそのようにいいうる。

「学友会」は７つの部と庶務・会計係から構成されていた。７つの部とは、校風の発揚をその職務とする「興風部」、弁論の練習を目的とする「講演部」、外国語の習得を目指す「語学部」、体育の発達に寄与する「武術部」「運動部」ならびに「短艇部」、そして各部の報告と知識の交換を担当する「編纂部」である。このうち最も重要な位置が与えられていたのは「興風部」である。同部は「学友会」会則第２条を根拠とし、「校風発揮の機関として特設」されたものであったのだが、さらに11節からなるそれ自身の細則をもっていた[20]。

(2)「友団」の活動とその意義

「興風部」の細則は、数節を割いてその下部組織である「友団」を規定していた。それによれば「友団」とは、現在居住地にしたがって定められた10名以上20名以下の学友会員の団体であり（細則第２節）、そこには互選による任期１年の団長および副団長が１名ずつ置かれ（第４節）、また役員は毎年５月と11月に総会に出席すべきものとされ（第10節）、そして団友が相互に徳義の修養を奨励することが期待されたばかりでなく、逸脱者に対しては注意を与えるほか、場合によっては会長（水島）に諮って「相当の処置をなす」ことも想定されていた（第８節）[21]。

たしかに当時の学生らは、この団体において天野（2003）が紹介したような村塾的共同生活を送っていた。たとえば、1909年の卒業生である上野福三郎の回顧はそのニュアンスをよく伝えている[22]。しかしここで問われなければならないのは、水島がこの「友団」を通じて行おうとしていたことのほうであろう。

彼はこのように述べていた。「人の徳性及び習慣は、日常起居寝食の間に、自然に養成せらるゝ」ものである。「人数凡そ十人位も集まれば、其中には必ず、志操の堅固なる、品行の方正なる人が、何人か、存在するものと見て、差支えない」。したがって「常に起居を共にし、或は相接近したる所に居りて、常に往来する友人の間に於て、相戒め、相励ますと云ふ方法が、最も有効であると、余は信じて居る」[23]。

また彼は友団を「家庭本位」という言葉で形容することもあった。「我国の如く深き根底あり長き歴史ある家庭本位の制度を執り来れる国にあっては、祖先を崇拝し家を重んずる精神を涵養せむ事国民道徳上最も重大なるを思ふ。家庭より更に一歩を進めて郷党若くは出身校を同じくせる会員相集って友団を組織し、互に切磋し琢磨するに何の非か之れあらむ」[24]。

「家庭」や「郷党」というのは、そのなかでの長年月の交流を通じて人々が親密になるとともに、共通の歴史を先人から引き継ぎ、後人へと譲り渡してゆく場所であるともいえるだろう。このように考えれば、水島が「友団」に期待していたことを、つぎのように理解することができるのではないだろうか。

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

すなわち、「友団」における共同生活を通じて、学生らはあたかも家族のように親密な間柄となりうる。また個々の学生は、友団－興風部－学友会というルートによって教員や水島ともつながっていることから、学生同士だけではなく、上下のあいだにも親密な関係が生まれ、その場合には先人の良識が彼らに伝えられることもありうる。そしてもしそのような間柄や関係が成立すれば、「家庭」や「郷党」のような、ある種の全体性を表す観念が彼らにもたらされ、彼らはそれに対して愛着や誇りを抱くようになる。その結果、あたかも「家庭」や「郷党」を意識する人が示すのと同じような態度、つまり「神戸高商」という名を汚さぬように心掛ける態度が、学生のあいだに生じてきてもおかしくはない[25]。

要するに、学生らの全体性に対する尊重が「神戸高商」にまで広がれば、そこから「社会」の公益を尊重する態度としての「士魂」まではあと一歩である。このようなことを水島は狙っていたのではないだろうか。

6．徳育の影響

この節では神戸高商の徳育が学生らに及ぼした影響が考察されるが、すでに述べたようにその対象は出光佐三と和田恒輔に限られる（彼らは水島のことによく言及していた人物でもある）。以下では、①経営理念、②利益のとらえ方、③後進の育成の３項目について、この二人の思想と実践を紹介してゆく。

6－1．経営理念

公益に奉仕するための商業（ビジネス）という考えを神戸高商で教えようとしたのが水島であったと筆者は理解している。ところで経営目的を公益とかかわらせて表現したものを「経営理念」と呼ぶとすれば、会社の経営者として、彼らはどのような「理念」に従っていたのであろうか。

(1) 出光佐三の場合

出光佐三が定めた「理念」についてはすでに他稿で考察したので、ここでは繰り返さない[26]。ただ、彼が水島の正統な後継者であったことを端的に示す発言を紹介するにとどめよう。「もし、武士が自分を超越して他人のため、社会・国家のためにつくすあの士魂を持って、しかも金を大切にすることを知って事業を経営したならば、ちょうどいまの出光のような形になっていただろう、と思うのです」（『我が六十年間』第２巻、p.437）。

(2) 和田恒輔の場合

和田の評伝によれば、彼が事業経営の第一線から退いた1968（昭和43）年に、ある人が彼に向って「富士電機の伝統の精神は何であると思うか」と尋ねたという。彼はこれに答えて７つの理念を示した[27]。

a）社業を通じ国家社会に貢献すること
b）社会奉仕の念に徹し、需要家の立場に立って物事を考えること
c）適度の利潤は求むべきであるが、同時に、供給した製品が真に需要家に役立ち、需要家が満足されることを自らの楽しみとすること
d）技術の開発、改善に徹し、品質の向上、原価の低減に努力すること
e）社内は「和」の精神に徹し、一致協力社業にあたること
f）「和」は互譲互助によってこそ達成される。各人は互いに相手の立場と心を篤と理解し合うこと
g）労使の協調は社業発展の基礎をなすものである。両者は常に協調の精神を忘れず総力を挙げて業績の向上に努力すべきこと

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

とりわけ、a）およびb）は、彼が公益を強く意識していたことを明確に示している。もっともこれらすべての理念は、彼が富士電機を「社会の公器」とみなしていたことを物語っていよう。

6－2．利益のとらえ方

公益に資するとはいっても、事業経営は営利の獲得を不可欠の要素とする。この点についての彼らの考えはどうだったのだろうか。

(1) 出光佐三の場合

他稿でも述べたことだが、出光は常々部下たちに「黄金の奴隷たるなかれ」と説いていた。その意味は、営利の獲得は自らの力を高めて国を盛り立てることにあるのだから、われわれは私利を追いかけてはならない、ということである[28]。

(2) 和田恒輔の場合

営利のとらえ方にかんする和田の見解は上記c）のとおりであるが、この点をもう少し具体的にみてゆきたい。

1905（昭和38）年1月の随想「これからの企業づくりと経営者」のなかで、彼は企業の「利益」についてつぎのように述べていた。「私はむろん企業に営利は不可欠であるから、そのためには利益の追求も徹底的にやらねばならないと思う。しかし利益の追求だけをやったらいいということではけっしてない」。「…利益を得ることだけであれば、この資本主義の社会で、そう七面倒くさいことをやらなくてもいろいろの方法がある。だが、すくなくも今日の社会に於ては、自分の仕事を通じて、例えば、私の会社なら電機の仕事を通じて、いくらかでも社会のお役に立ち、国家のためにお役に立つということを、常に頭に入れてやらなければならない」。したがって「利益追求にはおのずから限度があって、常識的に、かつ良心的にということになってくる」[29]。

つまり上記d）の手法（技術の開発・改善、品質の向上、原価の低減）によって顧客の信頼を獲得し、そしてそれを通じてもたらされた利益が、彼にとって正当な営利だったのである。

6－3．後進の育成

事業の遂行には、共通の「理念」に従う仲間を必要とする。ではこの点にかんする彼らの実践は、神戸高商における「友団」の経験から何らかの影響を受けていたのであろうか。

(1) 出光佐三の場合

出光の従業員とのかかわり方については、従業員をあたかも家族とみなす「四無主義」という方針がよく知られている[30]。しかしここでは、「友団」の影響という側面に限定して彼の取り組みを紹介する。

「友団」の特徴は、何といってもその共同生活による相互啓発ということであろう。おそらく出光は、水島の「友団」を模して従業員を教育していたと考えられる。これは出光商会の創業から間もなくのことであろうが、彼は「合宿所」をつくって若年従業員全員を住まわせた。その理由は、当時の「世間の悪い」風潮から若者を隔離すること、そして悪習に染まった若者を矯正することであった。実際、出光の語る「合宿所」での取り組みは、「友団」のそれとよく似ていた。―「（合宿所の運営は）給料より多くの経費がかかったのでありますが、しかし「人間をつくるのに経費を惜しんではならない。そうしてお互いが、監督し合って、ぶんなぐってもいいから悪いやつは直せ」というようなことをいって、どうしても直らない者は私にいってこさせて私の手でまた直すということをやり続けて、決して罷めさせなかった」[31]。

(2) 和田恒輔の場合

残念ながら、後進の育成ということにかんす

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

る和田の実践を裏付ける資料は手に入らなかった。とはいえ、その思想は明らかである。彼もまた、企業は「家」、従業員は「大家族」であらねばならないと考えていた。

たとえば『和田恒輔さんを偲ぶ』によれば、富士電機の機関紙『不二』は、この「大家族」相互の連絡・懇親を目的として1933（昭和８）年に発刊されたということである[32]。また戦後の復興期に同業他社の多くが長期の労使紛争に巻き込まれていたにもかかわらず、同社ではそのような抗争を経験することがなかったという。和田が折に触れて示した信頼関係重視の姿勢が、生活苦のためにすさんだ組合員の心を鎮めたのだろう。組合委員長の清本訓利によれば、和田はストライキ寸前の緊迫した状況において「富士電機の唯一の特徴とも言える労使間の信頼もしくは安定、それにヒビが入るとすれば、私には経営の自信は持てない」と組合員に訴えたというが、その口調からは富士電機を思う一念からの組合に対する哀願の響きさえ感じられたというのである[33]。

おわりに

この小論で検証されたことは以下である。すなわち、草創期の神戸高商ではいわゆる実学重視の教育がなされていたが、しかしそれだけではなく、ある種の徳育つまり教育者自身がもっていた理念や規範の教授も重視されていたということである。あわせて同校の水島の理念が、少なくとも出光と和田に受け継がれていたことも確認された。

さらにこの小論における「友団」の記述が示唆していることを付け加えておきたい。それは、商業（ビジネス）とは公の目標のための手段であると観念されたときにはじめて倫理的になりうるということである[34]。なぜなら筆者の解釈では、神戸高商における「友団」の共同生活は、全体性という観念を学生らに気付かせることによって、全体のための利益（公益）を志向するようにさせるものであったからである。

さて、以上からいくつかの課題が導かれるように思われる。第一に、冒頭でも触れたように、そもそもなぜ水島は徳育を重視したのかということである。日露戦争前後に商業界の道徳が悪化していたという出光の言説がそのひとつの理由となるだろうが、そうするとそこから当時の混乱状況を実証的に示さねばならないという課題がもたらされる。このことと関係して、第二に、水島が望んでいたような商人の徳性の向上は、明治後期から大正期を経て、どの程度達成されたのかという疑問も浮かんでくる。そして第三に、神戸高商に続いて創設された高商に水島の教育の影響はあったのかということも確かめられなくてはならないだろう。

このように今後の課題はいくつも残されており、しかもその解決は容易ではないのかもしれない。しかし企業に社会的責任が求められる昨今、明治大正期の高等商業学校における教育活動の実態を探ることには、ある種の現代的意義が認められるのではないだろうか。

謝辞

出光佐三氏にかんする資料調査では出光興産株式会社広報CSR室の皆様の、また神戸高等商業学校にかんする資料調査では神戸大学附属図書館大学文書史料室の野邑理栄子氏のお世話になりました。心より御礼申し上げます。

注

1　このような変化の背景には、戦争の勝利、そして主要貿易相手国であった英国とのあ

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

いだの不平等条約の改正などの動きがあったと考えられる。

2　彼の略歴は以下。神戸商業講習所（現兵庫県立神戸商業高等学校）卒、高等商業学校（後の東京高等商業学校、現一橋大学）卒。府立大阪商業学校（現大阪市立大学）の校長心得を務め、横浜正金銀行勤務等を経て、1902年に神戸高等商業学校の初代校長に就任した（愛庵会編、1940、pp.325-328）。

3　1903（明治36）年５月の始業式で、水島は修学上の教訓として学生たちに①学問の応用、②体力の養成、③道徳の修養等の重要性について述べている。特に③「道徳の修養」については、「商人の最も重んずべきは道徳なり、若し道徳に欠くる所あらば仮令学問あり体力あるも成功は到底得らるべきにあらず」とし、当時の商業界の廃頽した道徳の挽回が学生たちの任務であるとも述べている（『学友会報』第１号、pp.1-4）。

4　出光の言行録（『我が六十年間』『出光佐三言行録』）には水島にかんする言説が多数見られ、たとえばつぎのように述べている。「水島校長が、私どもに書いて与えられたものは「士魂商才」ということでした。清廉潔白にして、無私の姿で責任を果たせ、士魂を持って国のために働け、人を害せず商売をやり、金を尊重して事業をやれ、というのが士魂商才です。出光の経営は、その士魂商才をやっておるということです」（出光興産株式会社店主室編、1985、第３巻、p.383）。

5　この点については、たとえば当時の様々な環境変化が引き起こした諸問題、そしてそれへの対処としての諸政策の立案と実行といったような文脈のなかで、④を論じることが適当なのかもしれない。

6　以下の叙述の一部は、井上・玉井（2014）に依拠している。

7　なお、水島が卒業生らに「士魂商才」と揮毫した書を贈っていたことはよく知られている（出光興産株式会社店主室編、1985、第２巻、p.490など）。

8　坂田（1964）、pp.20-22。

9　商業から得られる富が国力の基礎であり、それによってはじめて外交、軍事、学芸などを発展させることができる —— このような主張は「尚商立国論」と呼ばれており、すでに福沢諭吉なども主張していた（福沢、2003）。しかしながら、当時の官尊民卑の風潮が有為の人物が商業へ向かうことを妨げており、彼らはそのことに反発していたのである。

10　兼松株式会社（1955）。

11　井上（2007）。

12　なお水島の理想とする商人は身体を酷使することが想定されていたのだから、彼の教訓に②体力の養成が含まれていたことは十分にうなずけることである。

13　商人の身につけるべき徳性について述べた水島の訓話の一部も紹介しておこう。「単に学芸に長ずるのみでは将来の成功は覚束ない。必ずや高邁なる人格、崇敬すべき徳性を具へた人でなければ大事業は出来ぬ」（『学友会報』第108号、pp.2-3）。

14　水島先生生誕百年記念事業会編（1966）、p.153。

15　同上、p.202。

16　同上、pp.36-37。

17　神戸大学百年史編集委員会編（2002）、pp.105-106。

18　谷本（1913）、p.1056。

19　神戸大学百年史編集委員会編（2002）、p.126。

20　『学友会報』第30号、p.394。

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

21 同上。

22 「…先輩、後輩の別なく年に何回か集まって、先生の話をきいたり、学業や個人的なことまで話をしたりして、お互いに協力してやっていくわけだ。で、昔の塾によく似たようなものでね。先生と学生との間の親しみもできるし、同窓生もこう仲がよいわけですよ。だからね、学生時代、単位をいくらとって、卒業証書をもらって、卒業したら後はどうでもいいという観念は、ちょっとその当時は、想像もおよばんことだったなあ」(出光松寿会、1910)。

23 『学友会報』第1号、pp.125-126。

24 『学友会報』第48号、p.40。

25 この解釈は井上・玉井(2014)と共通しているが、さらにこれを補強する事実を加えておく。1909年、友団の団長会は、素行不良により「本校学生の体面を汚す如き行為」をなした者に対し、上記の「興風部」細則第8節の処置を実際にとった(『学友会報』第33号、p.511)。

26 「人間尊重」「大家族主義」「独立自治」「黄金の奴隷たるなかれ」「生産者より消費者へ」の5つが出光商会(出光興産の前身)の基本理念であり、出光の語るところによれば、とりわけ「大家族主義」が水島の教えに由来する理念であった(井上・玉井、2014)。

27 「和田恒輔さんを偲ぶ」刊行委員会編(1980)、pp.88-89。

28 出光興産株式会社店主室編(1985)第2巻、pp.488-490、516-517などを参照。

29 「和田恒輔さんを偲ぶ」刊行委員会編(1980)、pp.114-115。

30 「四無主義」とは、従業員の解雇、出勤簿、労働組合、労基法にもとづく残業手当が同社にはないということを意味する(出光興産株式会社店主室編、1985、第1巻、p.819)。

31 出光興産株式会社店主室編(1985)第2巻、pp.347-348。

32 「和田恒輔さんを偲ぶ」刊行委員会編(1980)、pp.48-49。

33 同上、pp.291-294。

34 リン・S・ペインを含むHBSの研究者らが数年前に上梓したCapitalism at Riskのモチーフが、まさにこのようなものである。市場システムに迫る潜在的な脅威の抑制、ならびにその効率的な機能の維持のためにビジネス界はどうあらねばならないのか、と彼らは問うているからである。

[参考文献]

愛庵会編(1940)『水島銕也先生傳』愛庵会。

天野郁夫(1993)『旧制専門学校論』玉川大学出版部。

天野雅敏(2003)「神戸高等商業学校の精神史に関する一考察—校風「真摯、自由、協働」の形成過程をめぐって—」『国民経済雑誌』神戸大学経済経営学会、第187巻第3号。

Bower, J.L., Leonard, H.B., & Paine, L.S. (2011). *Capitalism at risk : rethinking the role of business*. Boston: Harvard Business Review Press.

大至会編(1960)『大至五十年』大至会。

福沢諭吉(2003)「尚商立国論」小室正紀編『福沢諭吉著作集 第6巻』慶應義塾大学出版会。

富士電機製造株式会社社史編纂委員会編(1957)『富士電機社史』富士電機。

平井泰太郎(1959)『水島銕也』日本経済新聞社。

出光興産株式会社店主室編(1985)『我が六十年間 第1巻』出光興産株式会社。

出光興産株式会社店主室編(1985)『我が六十年間 第2巻』出光興産株式会社。

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Business Ethics Study (JABES)

出光興産株式会社店主室編（1985）『我が六十年間　第３巻』出光興産株式会社。
出光興産株式会社店主室編（1993-1998）『出光佐三言行録―人間尊重の軌跡―　第１～18巻』出光興産株式会社。
出光佐三（2002）「国難に直面して水島先生を偲ぶ」「凌霜百年」誌編集委員会編『凌霜百年』凌霜会。
出光松寿会（1910）「士魂商才（その３）」『出光オイルダイゼスト』出光興産株式会社、第184号。
井上真由美（2007）『従業員による企業統治形成過程の研究』神戸大学大学院経営学研究科博士学位論文。
井上真由美・玉井芳郎（2014）「出光佐三の理念と神戸高等商業学校の教育者」『産業研究』高崎経済大学附属産業研究所、第50巻第１号。
兼松株式会社（1955）『兼松六十年の歩み』兼松。
橋川武郎・島田昌和・田中一弘編著（2013）『渋沢栄一と人づくり』有斐閣。
神戸大学百年史編集委員会編（2002）『神戸大学百年史　通史1』神戸大学。
神戸高等商業学校学友会（1904-1921）『学友会報』神戸高等商業学校学友会。
神戸高等商業学校学友会編（1928）『筒台廿五年史―神戸高等商業学校開校廿五周年記念―』筒台史編纂会。
校史出版（1967）『凌霜外史』校史出版。
水島先生生誕百年記念事業会編（1966）『愛庵先生の横顔―水島銕也先生外伝―』水島先生生誕百年記念事業会。
水島銕也（1899）「我国民と商業思想」『商業世界』同文館、第12号。
水島銕也（1924）「神戸高商の過去現在及将来」梨本彦八編『神戸高等商業学校開校二十周年記念講演及論文集』凌霜会。
李東彦（1992）「神戸高等商業学校における教育と人材養成」『神戸大学史紀要』神戸大学百年史編集委員会、第２号。
李東彦（2002）「明治後期～大正期神戸高等商業学校における学生の課外活動」『経済文化研究所年報』神戸国際大学経済文化研究所、第11号。
「凌霜五十年」編輯委員会編（1954）『凌霜五十年』神戸大学。
坂田吉雄（1964）『士魂商才―日本近代企業の発生―』未来社。
橋木俊詔（2012）『三商大―東京・大阪・神戸―』岩波書店。
谷本富（1913）『洋行土産談―教育宗教社会経済―』六盟館。
和田恒輔（1972）『杉並木―随筆―』中央公論事業出版。
「和田恒輔さんを偲ぶ」刊行委員会編（1980）『和田恒輔さんを偲ぶ』「和田恒輔さんを偲ぶ」刊行委員会。

NII-Electronic Library Service